

しんかわ

# 新川（「御笠・博多堀川」、「御笠・那珂堀川」）

大野城市教育委員会



① 昭和 48(1973) 年頃の新川



② 昭和50(1975)年の新川



③ 平成 19(2007) 年頃の新川緑地帯



④ 昭和 48(1973) 年頃の新川

大野城市役所の東 200 m ほどの所に、大きな遊歩道が整備されています。これを新川緑地公園と言います。

③・④の2枚の写真を見比べてみてください。この2枚は同じ場所を撮影したものです。④の写真で川になっている場所が、③の写真では遊歩道になっています。この川は、江戸時代に運河として、日田街道（通称：太宰府往還）の西側に沿うようにつくられたものです。「御笠・博多堀川」や「御笠・那珂堀川」と呼ばれていたこともあります。

新川の一部は、昭和 54・55(1979・1980)年度大野城市都市公園化工事で埋められ、運河の歴史的意義を後世に伝え、多目的広場として活用を図るため、昭和 62(1987)年、遊歩道として整備されました。

江戸時代、現在の朝倉地域の年貢米などを福岡藩の城下町であった博多へ運ぶには、莫大な数の人や馬が必要な陸路運搬だったので、少ない労力で運ぶための運河が必要と考え、新しい運河をつくる計画を立てました。



「御笠・博多堀川」のルート（一部）

青破線：溝・河川として現存  
赤破線：現存していない部分

まず、福岡藩は領内に筑後川を使用した田畑の灌漑用水利用と年貢輸送負担軽減のための新川(運河)開削を目的とした二大運河連動掘削計画を立て、江戸幕府の許可を寛文3(1663)年に受けて着工しました。寛文4(1664)年、灌漑用水利用のための掘削工事は終了しましたが、年貢輸送負担軽減のための掘削工事は岩石などの障害が多く長い距離だったため難航し、労力や経費等が莫大になり、中止となりました。しかし、運河掘削が諦めきれなかった福岡藩は計画を見直し、寛延2(1749)年、現在の筑紫野市二日市から始まる新川(運河)開削の許可を江戸幕府から受けました。御笠郡吉松村(太宰府市)・那珂郡蓑島(福岡市博多区美野島)間の河川を利用した長さ約10km・深さ1.5mの舟運路を寛延3(1750)年にほぼ開通させました。開通したことにより、現在の朝倉地域の人々は、年貢米や大豆など他の荷物を人馬で筑紫野市二日市まで運び、そこからは川舟で運ぶようになりました。

およそ10年間、舟による運搬をおこないましたが、新川の水量は少なく、舟底がつかえて舟が進まない場所が多くあったので、カイや鍬を舟にのせて泥土をかき出して往来していました。このように舟の運行効率が悪かったため、宝暦12(1762)年、福岡藩は新川舟運の運行停止を江戸幕府に願い出て許可されました。そうして、運河利用がなくなると、その一部を埋め戻し、もともと田畑だった場所は、再度、田畑につくりなおしました。ただ、長さ1kmの緑地公園となっている部分だけを川として後世に残したのは、今後このような計画についての議論が持ち上がることを防止する意味もあったとも考えられ、実際、福岡藩内で文化8(1811)年ごろや文久2(1862)年に似たような運河計画が立てられましたが計画だけで終わり、実行されなかったということです。

(2010.09)

【参考文献】

- 『大野城市の文化財』第6集 大野城市教育委員会 昭和49年
- 『大野城市史』上巻 大野城市史編纂委員会 平成17年
- 『福岡県史』通史編 福岡藩(一) 福岡県 平成10年
- 『福岡県百科事典』上巻・下巻 西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部 昭和57年